

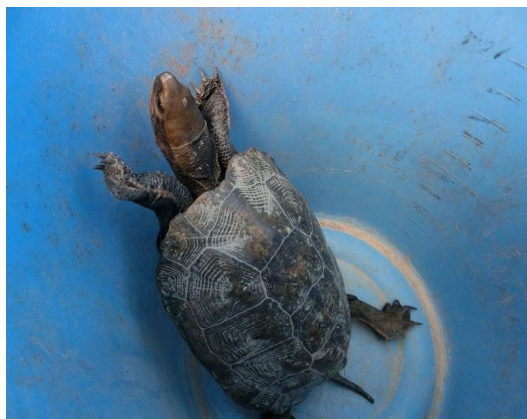
### 台風が 去りて残した 秋の空

台風の去った後は、空がきれいですね。無事に過ぎたという安堵感もあって、余計にきれいに見えるのかもしれませんが。

猛暑が去り、五日間の大雨が終わり、穏やかな秋が訪れると思ったら、真夏並みの暑さが続き、今度は台風の襲来です。ビニールハウスの場合、25m以上の風が直撃したら危ない、と聞いていますから、暴風対策も必至です。

9月16日に始まったイチゴ苗の植え込みは、9月25日までに、ほぼ終了しました。しかし、肥料や消毒、灌水チューブの設置や、親株やミツバチ管理など、やるべきことは尽きません。台風の方も、まだまだ当分は油断できないようです。

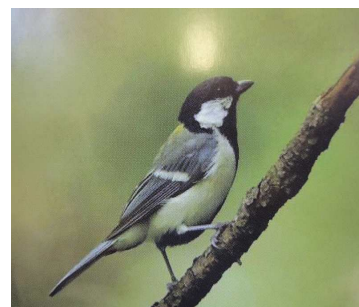
9月の初め頃でしたかね。庭を歩いていると、パタパタと羽ばたくような音が、どこか近くの方から聞こえてきました。すぐ側の山モミジの幹を見ると、私の目線の高さの所にカマキリがいたのですよ。自分と同じくらいの大きさのアブラゼミの胴体を長い手足でくわえこんでいました。羽音は蟬の最後の抵抗だったのですね。夏の終わりを象徴するような、生存競争の生々しい姿でした。



田舎で農業生活をしていると、思わぬ生物との出会いもあります。9月の初め頃だったのでしょうか。隣の奥さんが何事か叫びながら走ってくるのです。行ってみると庭に見事な「亀さん」が歩いているではないですか。普段見ることもない大きさなので、ビックリして呼んだのでしょう。私もこんな大きなカメを見るのは、ほんとうに久しぶりです。甲羅をつかんでバケツに入れ、記念写真を撮りました。手足をいっぱい伸ばすとバケツの上の縁まで届きましたから、体長が30センチ近くあったと思いますね。思案のあげく、近くの川まで行って放

してやりました。30年位前の、私の子供の小さな頃に、田んぼの側の小さな用水路で捕まえた記憶がありますが、以後見たことはありません。広島市郊外のこの辺りも、田畑より宅地が増え、彼らには住みにくい環境になってしまったようです。あれはこの辺に住む「ラスト カメさん」だったのかもしれませんが。うちの何処かに棲みついて、時折姿を見せる「へびさん」同様に、なんとか生き延びてほしいものです。

最近では以前よくいたツバメやスズメを、あまり見なくなりました。わたしのハウスの近くでよく見かけるのは、スズメくらいの大きさの、白黒の、「かわいい小鳥です。「チチッピー」と高い声でよく鳴きます。「バードウォッチング」〔注1〕という本で調べてみたら、「シジューカラ」という名前でした。写真は、うまく撮れなかったもので、前記の本より、無断転載させていただきました。





先日、ツルのような大きな鳥が、近くの畑に下りてきて、じっと立っています。急いでデジカメを取りに行き、できるだけ近づいて、ズームで何枚も撮りました。彼(彼女?)は10 m位までは、私が近づくの許してくれましたが、さらに近づくと大きく翼を広げて飛び立って行きました。その時に撮った写真を参考に、本を調べると「アオサギ」という名前とわかりました。「体の上面は青い灰色、日本で見られる最も大きなサギで、体長93cm。」とあります。川原や湖沼にいる鳥に入っていますから、この辺では見ないはずですね。

今年は新しい畑を開墾しました。場所はイチゴハウスの隣の空き地なのですが、昨年89歳で亡くなった父が、そこに鉄骨ハウスを立ったのが55歳の時ですから、以後35年間も畑として使用していないことになります。なぜそんなことをするのかというと、ソラメ専用の畑をつくるためなのです。「コラム23:ソラメの話」で書いているように、ソラメは連作がきかないのです。母の話では7年ダメというのですが、そこまで畑を換えながら作るのは大変です。ともかく家のまわりの畑では作る場所がないので、新しい土地の開墾、ということになったわけですね。

予想以上に、大変な作業でした。長期間にわたって使用していない土地というのは、固くなっているんですね。近所の友人に大型の耕運機で全体の土をならしてもらったのですが、後が大変でした。土地がやせていると判断して、バーク堆肥を十分にばらまき、苦土石灰を丁寧にまいて、小型の耕運機で土を混ぜこんでいったのですが、小石その他のゴミが次々と出てくること、ウンザリしました。土を耕す爪の回転軸に石やレンガが挟まるし、針金や寒冷紗のクズを巻き込むし、その都度止めて、除去しながらの作業です。



それを終えたら、今度は鋤(すき)を使って畝づくりです。初めて畑にする土地は土が硬く、畝づくりのための土盛り作業はシンドイ仕事でしたね。その日は陽が落ちて暗くなるまでやって、なんとか畑のかたちになりました。定年になって気楽な身分になったはずなのに、どうして自分だけが……と思うこともありますね。空を見上げればカラスが山の方に帰っていきます。「あいつは、ワシのやっとなことを、どう思っで見下ろしとるんじやろうか? 人間言うのはアホなことをして生きとるのう、などと思とるんじやろうか」……なぜかそんなことを想いましたよ。

翌朝、「畑つくり腰痛」の私に代わって、母と妻がソラメとサラダ豆(ツルありエンドウ)を蒔いてくれました。後は、たまの草取りと寒肥、アブラムシの消毒などをすれば、来年の6月には、美しい見事な実をつけてくれることでしょう。

「この世に生まれて、生活をして、やがて皆この世から消えていくんじゃないか。人間いても、虫や鳥と同じようなもので、大きい自然の中で生かされとる生き物の一つにすぎんということよのう」

(注1)「楽しいバードウォッチング」矢根保 著(三誠社 発行)を参考にさせていただきました。

私はこの本を学生時代の友人からいただきました。彼は著者の兄にあたりますが、私自身は、著者が大学入学当時に一度会った記憶があるだけです。著者は、小学校長を務めるかわら、鳥学会や自然保護協会で活躍されていましたが、この本が発行された平成23年8月の一か月前に、完成本を見ることなく、病により逝去されました。享年59歳であったそうです。

